

風土論に基づいた景観の計画・運営の 理論と実践に関する試行的考察

山口 敬太¹

¹正会員 京都大学大学院工学研究科 助教

(〒658-0065 京都市西京区京都大学桂C 1, E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)

本稿は、Berqueの風土論、木岡の風景論を理論的な基礎として、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための理論を基礎づけること、実践理論へと展開することを試みるものである。本論では、風土論の論点の整理を行った上で、風景表象が生まれる基盤となる風土的關係について、1)視覚的關係、2)知覚的關係、3)象徴的關係、4)社会的關係、5)情緒的關係の5つの切り口を示し、それぞれの関係について考察した。その際、風景を対象とした既往研究の再整理を行い、切り口ごとの風土論における位置づけを明確にした上で、研究の課題を示した。さらに、木岡による風景経験の構造論的な把握と動態論に基づいて、「語り」の観点から、景観の計画・運営における実践論を展開し、風景づくりの考え方の新たな枠組みを示した上で、今後の課題と展望について述べた。

Key Words : 風景, 景観表象, 語り, *Landscape Management, Sense of a Region*

1. はじめに：問題の設定

人間は自身の生きる環境を、いろいろな象徴を通じて理解し、さまざまな技術をもって利用してきた。Berqueによる風土論における「風土」とは、このような、環境という基盤 (S: *subject*) と、人間によって述語化された世界 (P: *predicate*) との間に、歴史的につくりあげてきた関係 (S/P : SをPとして捉える＝環境を世界として捉える) をいう¹⁾。そして、風土論の枠組みにおいて、風景は、視覚的・知覚的経験を通じて感じられる環境の眺めという意味を超えて、特定の風土性のうちにだけ存在し、特殊な文化的背景のもとで「発見」あるいは「発明」されて表れる現象、として扱われる²⁾。

本稿は、この風土論を基礎として、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための理論を基礎づけること、実践理論へ展開することを試みるものである。景観の「運営」とはなじみのない言葉ではあるが、景観とは一挙に形成されるものではなく、地区社会を基礎として日常の意志決定のなかで形成されていくものである、という立場から、この語を用いている。

(1) 景観施策上の課題

景観政策は、都市政策の根本であるべきだと考える。しかし、日本の長い都市政策の歴史のなかで、景観は中心的な位置づけを与えられてこなかった³⁾。景観法や歴史

まちづくり新法の施行以後、先進的な自治体においては明確な都市像に基づいた総合的な景観施策が展開されつつあるが、多くの場合、依然として都市景観の表層を扱うにとどまっている⁴⁾。

その問題の背景にあるさまざまな理由の一つとして、景観施策上考慮すべき項目の多様さと広範さ、さらにはこれらの施策を総合的にマネジメントする視点の未成熟が挙げられる。都市の景観は、さまざまな施策が複雑に関係し合ったなかでの「結果」として形成される。本来であれば景観計画は、建造物や屋外広告物などの景観要素に対する規制や誘導などの表層的な施策にとどまることなく、公有地・私有地を含めた土地利用や地区計画などの都市計画や交通計画、防災計画などの種々の施策の総体として捉えられ、推進されなければならない。そこでは公共政策としての手続き面での成熟が求められる。

一方で時代は変わりつつある。環境の持続可能性の原則が主張され、一方で「生活の質を成長させることをあきらめない」成熟都市のあり方が模索されている⁵⁾。また、地域の歴史・伝統・文化の復権を掲げた都市再生の好事例が出ており、都市の歴史・文化やそれを表す景観が、都市戦略上においても重要な意義を持ち始めている。今後さらに多元化する社会の中で、地域住民がその地域の風土的個性を背景に、文化的独立性と自立性を獲得していくことが期待されており、歴史・文化は地域戦略上ますます重要な位置づけを占めるであろう。

(2) 学役割

一方で、40 年を超える土木分野の景観研究の蓄積によって、景観概念の明確化や拡充が進み、歴史景観や都市形成の理解も進み、地域景観の文脈や構造の読みとりについても知見が重ねてられてきた。さらには街路・広場・河川空間などの個別の土木デザインや場所形成の実践と有効な手段の検証も蓄積されつつある。そのようななかでも景観をめぐる現場の状況は目まぐるしく変化しており、特に「まちづくり」に対する関心が急速に高まっている。地域住民自らが地域づくりの方針を見出しながら、環境を評価し、行政や専門家との連携のなか実践的な風景づくりを進めていくというやり方⁴⁾は、今後ますます定着していくだろう。

以上のような状況下において学の立場からはどのような知見の発信が期待されているだろうか。たとえば、1) 景観現象の解明のための人間と環境の双方の理解、ならびに両者の関係の理解の深化、2) 都市像の設定と戦略および実践を支援する情報、技術、考え方の提示、については、これまで一定の成果を上げているが、さらなる知見が求められている。一方、3) 良好な地域景観の形成に資する総合的なマネジメント技術の開発とその有効性の検証、については十分な研究の蓄積があるとは言えず、今後の展開が期待される。そこでは、地域景観の評価における学際的なアプローチや、施策の総合性が問われる。このような地域景観づくりにいかに向かい、知的な貢献をするかが土木景観分野における新たな課題の一つになっている。

(3) 風土という視点

哲学分野においては「風土」や「風景」についての考察が深められてきた。本論ではベルクの風土論・風景論と、それを理論的基礎とした木岡の風景論を取り上げる。まずは、ベルクによる各用語の定義の一覧を表-1 に示す。ベルクの風土論の背景には、現代日本の都市の有様における、風土性がよく現れた「生きられる風景³⁾」の喪失、共通の趣味に対する敬意の欠如という「風景知の解体」、「殺風景」の支配⁴⁾という現実に対する問題意識がある。そして、この風景をめぐる問題の背景にある、客観的環境を絶対視する近代的な環境観、個人の存在を前提とする近代的な人間観、を超えること（すなわち近代の二元論を超えること）が、風土論の根本的主張としてある。すなわち、単なる物理的環境ではなく、風景として把握されたある環境⁵⁾があり、場所や風土と一体となった人間（すなわち風物身体としての人間）があり、その両者の間に現れる風景こそが「現実」であること、を認めなければならない、という主張である。

これは、景観計画の視点からみれば、風土の連続性を重視した環境整備を目指すべきだという主張ともいえる。

表-1 ベルクによる風土の基本定義⁶⁾

用語	定義
風土 Milieu	ある社会の、空間と自然とに対する関係。この関係は物理的にして現象的である。
風土性 Mediance	風土のおもむき。風土の関係の客観的傾向であると同時に、その感覚/知覚にして意味でもある。
風景 Paysage	風土の感覚的かつ象徴的次元。感覚で捉えうる風土性の現れ。（見られるものに属するのと同様に見ることに属し、客体と同じだけ主体に属する）
通態性 Trajection	風土性をうみだす、主観的なものと客観的なもの、物理的なものと現象的なもの、生態学的なもの象徴的なものとの風土＝歴史的な結合過程。

ただし、連続性を考慮すべきなのは、物的環境そのものではなく、人間と環境の間の生きられた関係、歴史のある関係、つまり風土的な関係（和辻の言う「関わり」）そのものであることには留意しなければならない。

この考えによれば、景観の計画や運営にあたり、狭義の「景観」は扱う対象ではあっても、あくまでめざされるべきは「風景」である。風景を単純に美しい／美しくない、といった外面的な価値で評価するのではなく、いかなる風土のもと、いかなる風景が生まれてきたか、ということを知り、それをいかに今後の環境形成へつなげるかが重要な論点となる。

(4) 景計画論の構造転換

以上に述べたベルクの風土論の考え方をふまえれば、景観計画の考え方は大きく変わらざるを得ない。一つは、景観計画もしくは風景づくりの本来の目的は「物理的環境の操作」にあるのではなく、「人間の環境世界を変容させる」ことにあるという認識の変化が求められる。それは、客体そのものとしての環境ではなく、客体としての環境と人間との間の生きられた関係（もしくは風土的関係）をより望ましいものにするということである。ここでいう人間とは地域住民を意味し、地域景観の計画においては、地域住民自身による営みが重要な位置づけを占める⁷⁾。

第二の点は、風土の表象としての風景は、そこで暮らす地域住民によって生みだされているため、景観の計画においては、観察者として、管理者としての「当事者性」を考慮する必要がある、そこでは地域住民の主観的価値判断を考慮しなければならないことである。さらに、景観とは一挙に形成されるものではなく、地域社会、地区社会にかかわる日常の意志決定の流れのなかで、絶えず考慮されるべきものである。すなわち、景観の計画論は、地域住民が自らの生きる風土に対するより深い理解に基づいて、自らの視点や価値評価を重視し、積極的な対話と合意形成によって、自発的に計画・運営する方法、への転換が迫られている、と考える。

そこで本稿では、風土論を理論的な基礎として、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための理論を素描することを試みたい。まずは、その理論的基盤としての風土論の論点整理を行う（2章）。次に、風景表象が生まれる基盤となる風土的関係（人間と環境の関係）について、切り口ごとの考察を行い、風景研究の意義とその可能性について示す（3章）。最後に、ベルク風土論を基礎とする木岡による風景認識の構造論的な把握と動態論に基づいて、景観の計画・運営における実践論を展開し、風景づくりの考え方の新たな枠組みを示す（4章）。

以上の考察を通じて、風土に基づいた景観の計画・運営のための理論および実践の基本的枠組みを示すことを、本論の目的とする。風土論が「風土」の観点から、近代的な認識論のパラダイムを超えようとするのと同様に、本論では、近代的な都市の計画思想のパラダイムを超えようを目指す。

これまで土木計画分野においても佐佐木や藤井らによって、地域づくりにおける風土の重要性が論じられてきた^{7) 8)}が、風土論に基づいた計画論の枠組みは示されていない。また、風土の議論は、概念的な哲学的論考が多く、あまり具体的な議論へと展開していないため、風景表象にもさまざまなものがあり得るが、その風景表象が生まれる基盤としての風土的関係について明確に整理されているわけではない。しかし、理論、実践の双方において、風景を対象とする実証研究を行おうとするとき、これを明確にする必要があるのは明らかである。

2. 風景づくりの理論的基盤としての風土論

(1) 風土論の視点

a) 風土的存在としての人間

ベルクの風土論においては、自然の環境と人間の風土とが明確に区別され、「風土」とは「大地の広がりに対する人間集団の関係」、すなわち「人間が、地球の広がりに対して生態学的、技術的、象徴的にもつ関係」とされる⁸⁾。一方、「風景」という概念について、明確な定義をしているコルバンによると、風景とは「空間を読解し、分析し、表象する仕方であり、美的評価へと供するために空間を図式化し、それに意味と情動を与える仕方である」とされる⁹⁾。そしてこの風景とは、環境を「風景として」感受することで生まれるものであり、特定の風土性のうちに（特殊な文化的背景のもとで）「発見」されて生まれる歴史的所産であるとされる¹⁰⁾。換言すれば、さまざまな風土において、それぞれの社会において固有な知覚の図式が成立し、その型にしたがって風景的なものの見方が展開した、といえる。

さまざまに異なる風土を生きる人間にとって、風景は

自己了解のきっかけとなる、というのが風土論の考え方であり、それは風土は人間の「存在の自己客体化、自己発見の契機である」という和辻の指摘^{11) 12)}を受けたものである。その考え方の根本には、我々人間が空間的・時間的（もしくは地理的・歴史的）に限定された存在であること、すなわち風土的存在であるがゆえに、風土が我々の存在の根拠であり基礎であることに対する認識がある。ただし、和辻が風土を通じて人間存在の理解を目指していたのに対して、ベルクらの主張は、風土性という「人間存在の構造契機」を意識し、積極的に実践において表現しなければならない、と実践に目が向けられている、という差異は指摘できよう。国土全体のスケールで生きられる風景を整備することができない状況とは、風景の持続不可能性、ひいては私たち自身の存在の持続不可能性を意味する。真の環境倫理と公共性の議論は、風土性を認めてはじめて可能になるというのがベルク風土論の主張である。

b) 風土をめぐる二つの視点

風景が特定の文化的背景のもと特定の見方をもって「発見」される歴史的産物であることは述べた。これについて、ベルクは文化史上最初に風景が「発見」されたのはいつ、どのようにかについて論じているが、その際に風景の誕生の基準として、以下の6つをあげている。

1) 場所の美しさを歌う文学。地名表現も含む。2) 観賞用の庭園。3) 眺望を享受するように設えられた建築。4) 環境を表現する絵画。5) 「風景」を言い表す単語もしくは語句。6) 「風景」についての明白な反省、である。ここに見られる基準からは、表象化された風景が考察の主な対象となっていることが分かる。なかでも、文学的美意識や環境設計上の美意識に基づく「美的」もしくは「象徴的」なものとして風景を捉えようとする傾向が強い。これに対して木岡は、表象化される以前の風景を、考察の対象として明確に位置づけた。この点で、木岡の風景論の特徴があり、本稿もそこから多くを学んでいる。一方、日本における「美的」もしくは「象徴的」なものとしての風景観の歴史的発達については、文化史学や文学論において、数多くの研究の蓄積がある（これについては次章で詳述する）。

さらにベルクと木岡が指摘していない風景表象の可能性について指摘しておきたい。それは、「美的」な風景の見方に対して、風景の成り立ちや仕組みを「理解」することによる高揚感によって得られる印象深い風景の存在である。それは、たとえば柳田国男の風景に対する態度が示すような、風景から環境と人間の関わりを読み取ろうとする態度はその一つである¹³⁾。「美的」な風景の見方は美意識に基づいているとすれば、この「知的」ともいえる見方は知的好奇心に基づいていると言えるだろう。ここには景観の計画を考えるにあたり重要な論点が

隠れている。それは、風土性の重視には、風景の「美的」な見方を育て、その見方についての環境整備の可能性がある一方で、風景の「知的」な見方を育て、その「知」によって裏付けられた環境整備の可能性があるということである。

(2) 景観計画における課題

a) 風土に対する意識の醸成

本節では、実際の風景づくりにおける課題について整理し、乗り越えるべき重要な視点を示したい。まず挙げられるのが、都市の近代化による、人間と環境の関わりの急激な変化、その不連続性による風土性の喪失に対する危機がある。それは景観の破壊と、人間の風景の見方の変容、の両面から現れる。前者が後者（人びとの意識）によって引き起こされる側面に着目すれば、風土性の持続には、人びとの意識のあり方が大きく関わっている。ここで留意すべきことは、風土性の持続を主張する立場には、少なからず歴史や伝統の意味が有する正当性の主張が伴うが、それは安易な歴史至上主義とみなされるべきではない。あくまで伝統的な知（教養、感性、知恵）の軽視に対する批判的態度によるものである。人びとの風土に対する意識の醸成のためには、伝統的な知の適切な評価、教育的側面も含めた意味のある情報の提供、対話と知的・美的交流、教育が重要であると考えられる。

b) 風景の表象化から公共的意志決定へ

平凡な（一見そう見える）風景も、そこに住み続けてきた自分たちにとっては特別な意味をもつ。さまざまな風土において、さまざまな風景が生きられている。これらが風景として意識されることが、自身の生きる風土、風景に対するまなざしに目を向けさせる。しかし多くの地域では、風景は表象のレベルに至っておらず、各個人の意識の内にはあっても、社会的には共有化されていない。このような状況下においては、景観計画上の課題として、風土の理解と高い意識に基づいた、風景づくりの実践のための方法論の構築が求められる。言い換えれば、表象以前の風景や、美的なもしくは実存的な風景をいかに風景として意識化し、かつそれを社会的に共有し、依るべき風景表象を明確にして社会的な規範とするための、各段階を導く計画論が必要である。

地域の歴史風土に基づいた、個別のかつ総合的な景観計画の立案においては、基準が明確な目標達成型ではなく、創造性指向の目標探索型にならざるを得ない。目標像を設定されたとしても、各計画の地区景観形成における関係主体間の合意、さらには政策としての市民総意としての合意が不可欠である。このとき、「科学的根拠の提示」のみならず、「共感と価値共有を促す仕組みづくり」が必要となる。

(3) 風景づくりの実践としての「語り」

a) 風景の動態論

風景とは基本的には個別的で主観的な経験であり、それ自体は共有可能な客観的な経験にはなり得ない。しかし、複数の主体が「言葉を交わす」ことで、個々の経験から、集団的な表象に変化し得る。この観点から木岡は、風景経験の成立・発展についての構造論的な把握を試み、独自の動態論を展開する。すなわち、風景経験を、1) 風景以前の〈原型〉に根ざした経験のうち、未だ「表現」の契機に至らず、日常的生における個々の暗黙的な実践のうちに生きられる風景〈基本風景〉の段階、2) 言語的媒介としての「語り」（物語）の集団的実践をつうじて具体化する経験となり、意味を持った風景〈原風景〉の段階、3) さらに、そうした共同的・社会的な経験の中から、集団に対する個の自覚によって生み出される〈表現的風景〉の段階、の3つの契機（事物の動的過程において、その変化・発展を規定する本質的・必然的な通過段階）から説明した¹³⁾（図-1）。

これまでも、風景が「発見」され「共有され」て、型をもち、ふたたび環境を「改変」する、という図式はさまざまな論者によって論じられてきた¹⁴⁾。木岡は、個々の風景経験のなかから、集団の経験としての原風景が生まれ、それを基盤として個の自覚に基づく表現的経験が成立する〈上昇の過程〉と、一度成立した表現的風景が下位の原風景を規定するような〈下降の過程〉の概念を示した。これをふまえて、風景は「語り」により物語性を帯び、「語り合う行為」が個別の経験を共同的な経験へと変容させること¹⁵⁾、さらには、共同的な経験を支える「物語の空間」が出来上がっていくことを示した。この木岡の風景の構造論的な整理と「語り」による動態論の概念は、風土へのまなざしに基づいた「わがまち」風景の発見、その価値共有と共同的実践という景観の計画論の構築の理論的基盤となり得る¹⁶⁾。

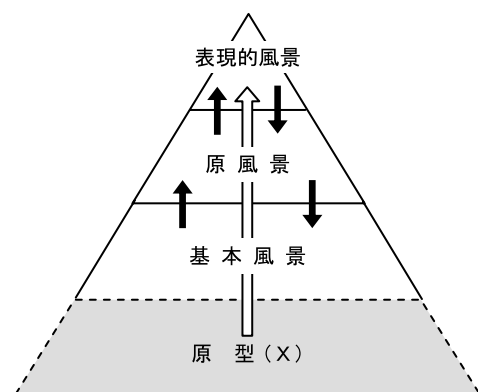


図-1 風景経験の諸契機の構造¹⁵⁾（木岡，2007）

b)「語り」の計画論への展開

木岡の「語り」を軸とした風景の動態論は、風土（もしくは風景）の議論の主題が、これまでの主な考察の対象であった「表象化された風景」だけでなく、「表象以前の風景」であるものの「語り」によって「表象され得る風景（生きられる風景）」の重要性を明確にした。

そこで、木岡が示す四段階の構造論的把握は、景観の計画論としてどのように展開することが可能であろうか。本稿でそれを試みれば、まずは風景に対する無意識の段階から、1) 風景の意識化、個人表象化（風景の発見）、2) 風景の集団での価値共有と「語り」を通じた集団表象化、3) 風景づくりの実践、すなわち計画の提案と実現における合意形成、という各計画論的段階へと展開が可能である（これについては4章で詳述する）。

一方で、「語り」の基盤となる風土に対する理解は、景観の計画のために不可欠である。なぜなら把握された風土性こそが、景観の計画の最も基礎的な拠り所となるためである。よって次章では、風土の理解のための研究課題について論じたい。

3. 風土論からみた風景研究の課題と展望

(1) 人と環境の風土的関係からみた視点の整理

風土（＝ある社会の、空間と自然とに対する関係）の理解をめざした、風景を対象とする研究のアプローチには、1) 形成された環境から読み解く、2) 構築された人間の生態、技術、象徴の体系を知る、3) 環境と人間の関係から読み解く、の3通りが考えられる。近代科学のアプローチに言い換えれば、1) は狭義の景観を表出させるその背後の要素や要因を解明しようとする、生態学などの自然科学研究、2) 人間本性の理解を目指す心理学や文化人類学などの人文科学研究を表す。そして3) は風景として現れる環境と人間の関係の理解を目指す風土学、とすることができよう。

本章では、この3点目に着目し、風景が表象化される背景にある、環境と人間の関係にはどのようなものがあるかについて、以下の5つの切り口（表-2）から論じ、これらの「風土的関係」の記述を試みたい。すなわち、1) 環境の見え方と観念の関わりを表す「視覚的關係」、2) 環境の非言語的な知覚のあり方と観念の関わりを表す「知覚的關係」、3) 環境に対する言語等による表現など、人間の環境表象に表れる「象徴的關係」、4) 環境形成や環境表象に関わる人間社会のあり方であり、社会を通じた環境と人間の関わりを表す「社会的關係」、5) 人間の環境に対する情緒的態度や感情的な結びつきを表す「情緒的關係」、の5つの観点から論じる。ただし、これらの関係はそれぞれ独立したものではなく、互いに関連し

表-2 風景表象の基盤となる風土的関係（筆者による）

関係の様態	定義
視覚的關係	視点場からの環境の眺めやその見え方と、それに対する人間の観念の関わり。人間による造景的行為も含む。
知覚的關係	人間の環境に対する非言語的な知覚のあり方と、それに対する人間の観念の関わり。たとえば、環境体験における感じの良さの感受や心理的満足など。
象徴的關係	言語的な表現をとまなう、人間による環境表象にみる、環境と人間の観念の関わり。たとえば、文学作品や芸術作品、造景作品に表れる。
社会的關係	あらゆる風景表象の基盤となる関係であり、環境形成や環境表象に関わる人間社会のあり方。社会を通じた環境と人間の観念の関わり。
情緒的關係	人間の環境に対する情緒的態度や、感情的結びつきを表す。場所愛着や原風景を含む。

合ったものであり、一つの関係についての考察は、ほかの関係についての考察も同時に含んでいる。

以下では、これらの視点から既往研究を再整理し、これらの風土論における位置づけを明確にしたい。繰り返しになるが、風土論に基づいた景観の計画とは、これらの関係の把握と再生を目指すものであり、本稿の作業は風土に基づく景観計画の可能性を探ることを意味する。

(2) 視覚的關係

a) 近代以前の風景にみる視覚的關係

人間にとっての視覚による環境の認識は、最も基礎的な環境の知覚様態であるため、環境の「見え方」は最も基礎的な考察の対象となる。日本人は、突き出た山や優美な山に神聖さを見出したり、奥まり圍繞された谷に靈性を見出したりしてきた。このような伝統的な自然環境の「見え方」と、それに対する人間の「見方」、それらの対応関係については、主に地形景観を対象に研究が進められてきた。特に山を題材とする研究の充実が日本の特徴である。その先駆けである樋口の研究は、日本の神社や寺院、農山村や漁村の集落あるいは古都を対象に、その景観の「地」としての自然地形に着目して、地形の空間構成的意味とその構造を明らかにした¹⁶⁾。空間構成の考察においては、リンチやシュルツが用いた方法¹⁷⁾と類する境界、焦点・中心・目標、方向、領域の各要素の構成の読みとりを行い、意味的考察については主に古典文学の解釈と民俗学の知見を援用した。この研究の方法論は現在もなお有効であるが、風土の理解のためには、これに加えて景観の「時代性」への評価が必要であり、時代ごとに、景観に対する選好とその思想的、文学的背景を一体として考察する必要がある。たとえば主に中世園外眺望の史的展開の過程を明らかにした本中の研究¹⁸⁾や、風水思想における景観の捉え方を論じた黄の研究¹⁹⁾、平安時代の別業や江戸期の隠遁詩人の景観選好と文学的景観表象を論じた拙稿²⁰⁾などはその試みといえる。じつ

さい、高橋が示すように、京都の山の見方だけでも非常に多岐にわたる見方がある^{21), 9)}、これらを整理し、各地における景観の物理的特性（見え方）と景観表象（見方）の関係を体系化していくことは重要な課題である。

一方、見え方をより精緻に捉えるために、地形の透視形態²²⁾に着目した研究も進展がみられ、山岳の見え方とその思想的背景について論じた齋藤²³⁾や神山²⁴⁾の研究や、見え方と宗教空間の領域との対応関係について論じた出村の研究²⁵⁾は、日本の伝統的な風景における見え方と見方の理解のための知見を提供している。

このような地形が形成する空間（宗教空間や別業空間）の構成と、そこに人間が見出した意味やイメージ（神聖性、精神性、非日常性）との対応関係を把握することは、風土の理解の一つの主要な方法であり、これは風土に基づいた景観の計画のためには不可欠であると考ええる。

また、近世以前の土木技術や建設行為の解釈を通じて、ある時代に固有の造景の作為、意匠から視覚的關係を読み解くという方法もある。近代以前の京都の神社仏閣を対象に、地形と敷地計画の対応関係について考察し、地形の機能的かつ造景的な活用方法を明らかにした山田の研究²⁶⁾や、古庭園対象に近傍地形特有の地形の空間特性を活かし、囲まれ感と奥行き感の両立を満たす敷地構成の技法を明らかにした拙稿²⁷⁾（図-2）などがある。これらは、大規模な地形改変を行わない造景手法や、地形空間を効果的に活用する伝統的な景観デザイン技術を発掘するなど、現代の計画に活用が可能な技術として、暗黙知を形式知化するという面においても意義がある。また樋口ら²⁸⁾、日高ら²⁹⁾、谷本ら³⁰⁾の研究などは、地形条件や歴史的経緯の差異によって、地域ごとの差異や多様性があることを示している。これらの地域間比較は、その地域の風土の特徴を明らかにするとともに、過去の人間の創造性や技術を発掘し、現代の風景づくりにアイデンティティを与えてくれる。

b) 都市の景観にみる視覚的關係

日本においては、自然景観に対する観念が古くから発達したのに対して、都市景観に対する観念が発達したのは遅れており、それも一部の専門家に限られていた³¹⁾。西洋においては17世紀頃から長い直線街路のヴィスタや幾何学的な広場が、都市のデザインに用いられた。これは15世紀の始めの画家による遠近法の再発見、16世紀の透視画法の流行の影響を受けてのものであった³²⁾。19世紀前半のイギリスにおけるピクチャレスク風の都市デザインも芸術の影響を受けていた。これらの思想は欧米においては現在まで継承され、前者は記念碑的な都市建設をめざす都市美運動やモダン・アーバンデザイン、後者はアーバン・ビレッジやニュー・アーバニズムなどへと展開している。

一方、20世紀前半の欧米においては、機能主義的な観念³³⁾が広まるが、後半になると、前近代的な人間の豊かな暮らし方への回帰を含み、機能主義的都市建設に対する批判が噴出した。同時代には、西洋では英国のタウンスケープ派に代表されるような歴史都市を対象にした都市景観研究が発展した³⁴⁾。その背景には、歴史都市が有する有機的な空間構造と、そこから得られる視覚的な喜びを認め、分析的な手法¹⁰⁾で、相互の景観要素の間にある関係の技法を「再発見」する意図があり、じっさいに〈連続する視覚〉や、〈ここ〉と〈あそこ〉の効果など、都市景観の視覚的な効果を発見的に示した。

このように、都市景観は、特定の時代とその思想によって特徴づけられてきた。それを再発見するまぎなしも生まれ、日本においても、1960年代以降、伝統的な都市形態とその意味についてのいくつかのすぐれた論考³⁵⁾が発表された。その後も、たとえば宮本による城下町のヴィスタに基づく空間設計に関する研究³⁶⁾など、実証的な研究が進められている。

一方、実践面において、欧米と比較して日本の都市景観については、詳細スケールでの（アーバンデザイン・スケールでの）密度の高く面的に広がる都市景観の捉え方が成熟しておらず、景観計画における都市空間の質の

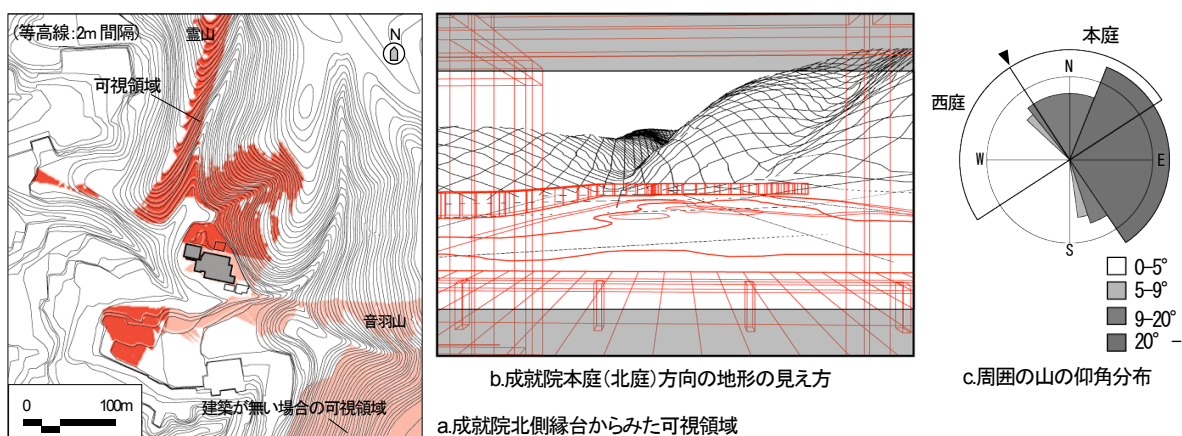


図-2 成就院庭園の景観の視覚的構造²⁷⁾（筆者作成）

議論が進んでいない。その理由の一つとして、日本独自の都市景観形成に対する哲学の不在や、評価の観点の不明確さがある。欧米のアーバンデザインや歴史景観保全において、背景となる思想や原理を捨象して技術のみを移入する、という態度ではその有効性は期待できない。日本の都市独自の課題の見極めとビジョンの再構築が必要である。

(3) 知覚的関係

a) 体験される知覚的な質による都市環境の評価

ベルクの風景論の立場からみれば、人間によって知覚され体験される「風景」こそが現実である。環境の知覚的な質には、瞬間的に見た印象や好みから、五感を使った豊かな体験を通じた知覚、情報を得た上での対象の認識、長期の記憶によって構築されるイメージと合わせた認識などさまざまなものがある。これらのイメージの総体が、知覚的な質を作り上げている。その一部が審美的な体験に基づいて風景として表象されると考える。知覚的に意識化されるに至っていない物理的環境は、たとえ大きな構造物であっても、リアリティのない不安定な実体でしかない。

文学作品などの文書を用いた知覚的な質の定性的把握（ただし、表象化されたもののみ対象となる）は古典的な研究の手法ともいえるが、西嶋ら³⁷⁾や出村らの研究³⁸⁾、拙稿³⁹⁾において、近世の紀行文や日記を用いて観察者の体験と知覚認識を地図上に表し、場所に固有の人間の行動のあり方について明らかにしている。このように、過去から現代に至る、場所ごと、時代ごとの知覚体験の多様性とその要因を探ること、それらと風景表象との関係を明らかにすることが目指されてきた。

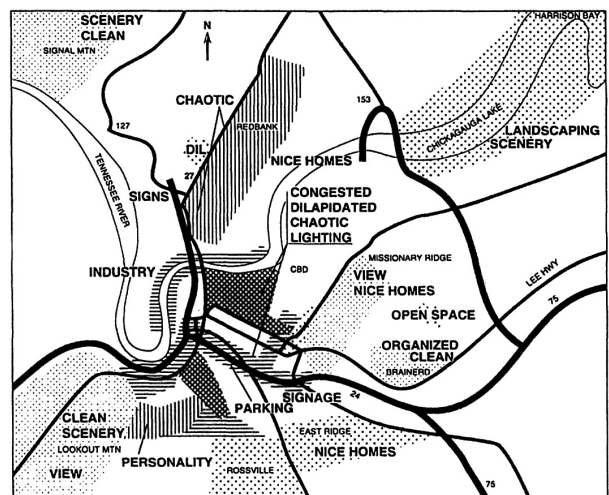
しかし、この「知覚的な質」が都市や地域の尺度で考慮されたことはあまりないし、成功した例もほとんどない。本来は日常的な環境の計画に際しては、視覚的な質に加えて、知覚的な質が考慮されるべきではないか。*“The Image of the City”*^{40),41)}で知られるリンチは*“Managing the Sense of a Region”*⁴²⁾において、人びとが住んでいる場所の知覚的な質や人びとにとっての意味を主題とする試論を発表し、そこで景観の体験が他のいかなる因子にもまして根本的であること、観察者と観察対象をともに考慮し、体験される環境の質を地域の尺度で計画すべきであることを訴えた。このリンチの計画哲学が多くの専門家に影響を与えたのは間違いないが、この「場所の知覚的な質」をもって都市環境を評価し、計画する方法論はいまも確立されるに至っていない⁴³⁾。しかし、リンチの指摘には今なお多くの示唆が含まれており、今こそその有用性が再検討されるべきであると考えられる。

知覚的な質という観点からの都市空間の再定義を行うことの目的の一つは、「風景をつくる」という意識を伴

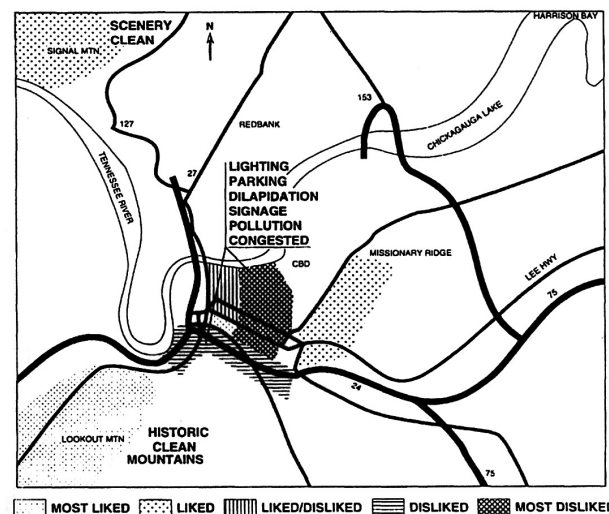
わず、結果的にそう「なった」風景に対して、それを評価し検証することが、景観計画の最初の手がかりになることにある。ただし、この知覚的な質はあくまで主観的なものであり、ある社会集団に特有の価値と概念、特定の場所や社会的役割、ある類型をもつ個人など、場所と人びとの個別性に大きく左右される⁴³⁾。この社会集団による差異は、未だ十分に解明されていない研究主題である。風景づくりにおいては、まずこのような個々人の生活史や価値観の尊重が必要である。それを政策立案や運用・評価に反映するために市民参加の手続きを整え、都市や地区の構想づくりに結びつけて意識的に「つくりかえていく」ことが目標となる。

b) 知覚的な質の把握とその方法

リンチは、*Sense of Region* 〈地域環境の感覚〉という概念を示し、知覚的な質を都市、地域の大きな区域の尺度で扱うことの意義を指摘した。そのための手がかりの一つが「遠景眺望」である。広々と開けた、また遠くまで見通せる眺望は、憩いや安らぎ、包括的全景を得ることによるなどの心理的満足のほか、定位の感覚や、場所の



a. 住民を対象とした口頭記述によるチャタヌーガの評価地図



b. 来訪者を対象とした口頭記述によるチャタヌーガの評価地図

図-3 口頭記述による評価地図⁴⁴⁾ (J.Nasar, 1998)

識別性の感覚を与えるとする。顕著な特徴をもつ眺望景観とその遠景要素（スカイライン、大きな地塊、重要なランドマーク、水面など）を、地域住民がどのように体験し、程度意識し、どう価値を認めているか、ということを知り、これらと地域イメージとの関係を知ることは今なお意義のある主題である。現在、GISなどの空間解析技術の発展によって、より高度で精緻な評価が可能となっている。

実際上の景観計画において、同質の景観体験を得られる地区の「領域性」を把握することの意義は小さくない。どのような知覚体験やイメージが、どのような空間において生まれているか、その対応関係を知ることで、よりきめの細かい地区区分による計画が可能となる。この領域性は、景観構成要素の同質性、空間の囲繞性/閉鎖性や、隣接する空間の接続における連続性、周辺との空間の差異による識別性などによって認識されるものと考えられるが、この主題についての研究の蓄積はあまりない。J.Nasarは都市のイメージをLike/Dislike（好ましい/好ましくない）という指標で把握し図示化（図-3、前頁）している⁴⁴が、こういった都市の正のイメージ/負のイメージの分布の把握は最初の手がかりとなる¹²。

また、風景表象の基盤となる環境の知覚的な体験のうち、人びとの特徴的な活動や行動なども、場所の知覚的な質を形成する。公共空間や市場のような賑わいのある場所、安心して休息や遊びができる快適な場所などがそうである。このような調査については、ウィリアム・ホワイトやPPS（Project for Public Spaces）の主要な手法である「観察」の有効性がある程度示されている⁴⁵。その他には、自由記述アンケートやインタビュー、住民主体によるコミュニティ・カルテの活用⁴⁶などがある。

(4) 象徴的關係

a) 「風景として見る」ことによる関係

風景はある環境を「風景として見る」ことによって表象化されるが、その基盤としての、物理的環境とそれに対する人間の観念（イメージや思考）との関わりを象徴的關係とよぶ。それらは文学や芸術、造景空間に表れる。ベルクの風土論においては最も重要な位置づけを与えられている。

ベルクは、前述した風景の誕生の6つの基準から、最初の風景の誕生は五世紀の中国において、謝靈運（385-433）の詩作品や、宗炳（375-443）の「画山水序」に、風景としての自然についての考察がみられること、と結論づけた⁴⁷。その背景として文官階級の余暇が隠遁の趣味を生んだことを挙げる⁴⁸。内藤湖南もまた、六朝時代において人々の風景の見方が、従来の風景に対する「神秘的」な見方から「趣味的」な見方になったことを指摘していた⁴⁹。

一方、風景は近代になってはじめて「発見」された、という論調もある⁵⁰。これは、近代以前の風景の見方は、定型化され固定化した風景の見方の枠のなかにとどまり、その枠を出て、主体の体験に基づいて「風景を自由に楽しむ視点がなかった」という主張である。たとえば、西田は、江戸後期以降の瀬戸内海において、定型化した風景の見方から、写實的、客觀的、合理的、觀察的な見方への変化が見られはじめたことを指摘しており、近代以降の風景が、近世以前の言葉や観念に近いものから、視覚像がより重要視されるようになったと指摘している⁵¹。この「近代的風景」と、ベルクのいう「風景」の発見については、意味が異なるため、両者を区別しなければならない。

b) 象徴的關係の発達とその要因

このように五世紀の中国における風景の誕生以後の、現代に至るまでの風景の発見と定着、形成と変容の過程について知ることが重要な研究課題として残されている。近世以前において、風景の表現は、和歌、漢詩、物語などの文学、謡曲などの芸能、倭絵などの絵画、庭園などにみられた⁵²が、なかでも、文学に描かれた風景表現は、後世の人々の風景の見方に大きな影響を与え続けた。奥野健男は日本の風景の特徴として、「既に物語や歌に表現された、また伝説や歴史の地を、つまり歌枕を追体験する旅」を通じて、風景は言葉や文学によってつくられた、と論じ⁵³、さらに「記紀、万葉、王朝物語の風景が、それにちなむ歌枕などの言葉、表現がやはり美の典型として、江戸時代、明治時代まで受け継がれる」と言及している⁵⁴。風景の表現は、言語表現を通じて共有され、後世の人びとが、その表現によって方向づけられた心的構え（見方）をもって眺めを体験することによって、本来的には表現であった風景が、体験となり集団表象化した、ということができる。このような現象については具体的事実に基づくさらなる検証が必要である。

そこで、いくつかの研究事例を挙げてみたい。たとえば、歌や物語による風景表象が、いかにその後の時代の人びとの名所観や風景観に影響を与え、名所づくりなどの環境整備を引き起こしたか（大室⁵⁵や長谷川⁵⁶、鈴木⁵⁷の研究、拙稿⁵⁸など）。山水画や風景画による風景表象が、いかに庭園における造景の意匠や、ほかの景勝地の発見に影響を与えたか（北川⁵⁹や真木⁶⁰の研究など）。また、近代に着目すれば、自然地理学の発達により、山岳や奇岩、溪流がいかに鑑賞対象へと変化し、名勝として保存されるに至ったか（大室⁶¹、黒田ら⁶²の研究など）や、自然主義的、ロマン主義的な文学表現や作家のまなざしが、いかに同時代の風景の発見へとつながっていったか（柄谷や加藤⁶³、川本⁶⁴、樋口の研究⁶⁵など）などが主題としてあげられる。以上にみたように、風景の象徴的關係を考察しようとするときには、時代性への詳

細な考察が不可欠である。

景観の計画・運営面における可能性としては、1) 物語や意味に基づいた象徴的な組み立て、2) 風景表象の掘り起こしと環境整備による可視化、3) 景観体験動線における景観の同質性やイメージの連続性の確保、などが考えられ、それぞれ方法論の充実が望まれる。

(5) 社会的関係

a) 社会的関係とは

あらゆる風景表象の基盤であり、環境形成や環境表象に関わる人間社会のあり方を、社会的関係とよぶ。この関係は、環境と直結している所有や管理の形式、地区活動の相互関係やそれを支える人間関係、技術力、環境に対する支配的なイメージや態度などの把握により理解が可能である⁶⁹。

社会的関係の一例として、景観の管理の側面をみれば、ムラ社会による普請から国家による国土計画まで幅が広く、さらに景観保全についても法、制度、慣習、任意活動など、さまざまな社会的関係が形成されている。また、景観形成の背景にあった技術的側面に着目すれば、灌漑や防災技術、交通、都市計画技術などが挙げられ、政治に着目すれば、伝統的な自治、統治と支配の政治、民主政治などと、その範囲は非常に広範に及ぶ。

b) 伝統的な農村における社会的関係

伝統的な生業のあり方、開発の歴史や自然認識の歴史に着目して、環境と人間の関係について明らかにしようという営みは、従来の歴史学において継続してなされていたが、新たな動きとして 1980 年代に社会学や民俗学において、1990 年代後半以降になると環境史や環境民俗学という研究潮流のなかで、研究がさかんになり⁷⁰、佐野⁶⁸や俵⁶⁹の研究など景観管理の歴史的展開に関するすぐれた成果が出ている。また、災害史、防災の視点においても研究が進んでいる⁷¹。この背景には、近代化に底流する合理主義化が、伝統社会や自立的な共同社会、既存の土着的・伝統的システムの維持に対して貢献しなかったことに対する批判を少なからず含んでいる。近年では、重要文化的景観（文化財保護法、2005 年改正施行）の選定を背景として、文化的景観の調査研究を通じた事例の蓄積が進んでいる。調査研究が活発化する一方で、景観の動態保存の問題が課題として浮かび上がってきた。景観を維持・形成する社会のあり方が変わらざるを得ないなかで、社会のあり方と景観保全をいかに結びつけ、現代的な方法で補完しながら、風景を持続させていくかが問われている。さらなる研究の発展と実践の蓄積が望まれている。

c) 都市における社会的関係

都市に着目する研究には、都市史、都市計画史、都市形成史分野における膨大な蓄積がある⁷²。しかしながら、

近代都市の形成が魅力的な都市創造にいかに関与したか、についての検証は大きな課題として残されている。工業化、大都市化、メガロポリスの形成を経てきた日本の都市形成が、内藤廣の表現で言えば、これまでの時代の「生存のための最適の様態⁷³」であったとするならば、これを検証するためには、都市建設における技術とその背景にある理念、主体、経営に着目して、近代以降の都市形成のメカニズムや、計画風土を理解することが不可欠である。

土木史、都市史は、技術史や制度史にとどまることなく、都市建設の背景にある社会のあり方や人びとの理念に着目した、風土の理解のためのより深い考察が求められている。景観表象との関わりに着目すると、景観保全施策の展開過程や景観論争などは重要な題材である。戦前の風致施策⁷⁴、緑地政策⁷⁵、国立公園や都市公園などの公園計画の展開⁷⁶については、既にまとまった研究がなされてきた。これらの研究は、当時の都市をめぐる状況や施策の仕組み等の社会的背景によって、施策決定者や景観保全の運動主体の考え方が、常に変化し続けていることを示している。このような景観保全のあり方を社会的背景をふまえて相対的に捉え、これらについて長い時間軸の上で、施策の評価（達成度や質）、効果の検証を行い、今後の課題の検討を行っていく必要がある。

このような社会的関係の理解はどのように実践の場で役立つのか。たとえば砂本が指摘するように、まちづくりの現場で歴史を扱うとき、多くの歴史的事実のなかから理に適う歴史が選好されていくこと、計画の対象としての正当性が見出される歴史ばかりが市民受けする歴史として選ばれていくことの危うさがある⁷⁷。これでは風土に根ざした持続可能な開発とは言えない。歴史の深層構造の理解は、特に歴史都市において、持続可能な地域づくりのために不可欠であると考えられる。また、市民主体の景観保全運動についての詳細な報告に基づく事例の蓄積も求められよう。

(6) 情緒的關係

a) 場所愛着と原風景

地域のあらゆる場所はどのように平凡であろうと、過去との連続性を表現している。その景観は、そこに長く住む人びとにとっては、愛着を抱く対象であったり、日常生活のなかで拠り所となっている場合がある。

場所への愛着 *place attachment* は、人と特定の環境との間の「感情的な絆」と表わされることが多い⁷⁸（園田、2002）。Low による定義⁷⁹は、1) 心理的には、特定の場面や環境に対する個人の認知的・感情的連結を意味するもの。2) 文化的には空間や土地の片隅での体験を文化的に意味深く共有されたシンボル（すなわち場所）に変化させるものとする。その後実証研究が進み、Raymond は、

個人的な愛着と、共有された歴史や関心に基づく共同体的な愛着を区分した上で、場所愛着に以下の4つの次元があることを示した。すなわち、1) 場所への帰属、2) 場所への依存、3) 社会との絆（家族、友人）、4) 自然との絆（Raymond et al, 2010）である^{79）}（図-4）。

また、場所の愛着が、自己と場所との一体感（自分が住区の一部であり、住区が自分の一部であるという感覚）の存在がいくつかの事例で報告されている^{80）}ように、「根づきと関与 *rootedness and involvement*^{81）}」（Taylor et al, 1985）も重要な概念である。じっさい、私たちは物理的に特色のある判別しやすい場所を好み、そこに感情と意味を付与する。そのような場所は、私たちにくつろぎと安定感を与える。そして、強い場所の感覚は私たちの自己認識 *personal identity* の支えになる^{82）}。さらに木村敏の研究^{83）}は、風景がより根源的に自己認識と関わっている可能性を示している。

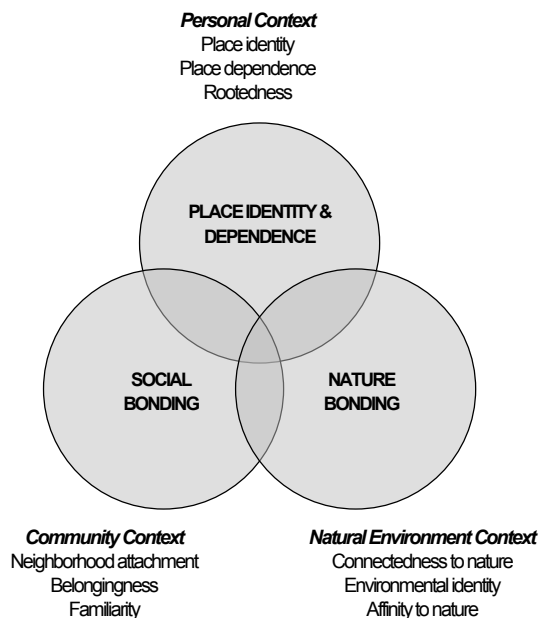


図4 場所愛着の概念モデル^{74）}（Raymond et al, 2010）

このように場所の愛着は、風景の表象化の基盤となる。人間と場所を結びつける要因としての、個人的ななじみ、過去の印象の強い体験、個人的/共同体的な帰属意識、所有、景観の過去との連続性、活動の場があること、などは、これまでの景観計画においてほとんど考慮されてこなかったが、欧米における20年に及ぶ研究が、それが重要であることを示している。なかでも、場所に対する集会的記憶は、知識や物語で伝えられ蓄積性をもち、それゆえの長期持続性を有するため、持続可能な景観計画を考える上で大変重要である。

b) 情緒的關係に着目した景観計画の可能性

先人の歴史や自分たち自身の歴史（ライフヒストリ

ー）が環境の上に残した「痕跡」は、それを通じて先人との対話や過去の想起が可能であるという点で重要な意義をもつ。痕跡を有する場所は物語を後世へ伝える「記憶媒体」であるのみならず、物語を体験として伝え、新たな社会的な表象を生み出す基盤となる。都市は、記憶のシステム（書物、物語、記録映像などとともに）であるともいえる。

一方、空間計画にあたっては、痕跡が知覚に与える情報伝達の量や質が考慮されてよい。まずは、そこに住む人びとにとって重要な物語の記憶や、その痕跡を記述する方法、さらにはその知覚上の質について明らかにすることが重要な主題である。

さらに、このような感覚をふまえて、記憶を可視化することや、風景を象徴的に組み立てることは、人間と環境の間に感情的な安定や、深いつながりを築くのに有効であると考えるが、公共空間を扱う場合は、その本物性 *authenticity* の確認や、合意形成の手続きに課題がある。

4. 風景づくりの実践論

(1) 「語り」に基づく風景づくりのフレームワーク

本稿2章では、木岡の風景の構造論的把握と動態論を理論的基礎とした、景観の計画・運営におけるフレームワークを示した。すなわち、「語り」に基づく風景づくりとして、地域住民の風景に対する意識を、個人表象の段階から、集団での価値共有、さらには実践行動へと、変化させることを含めて考える計画論の枠組みを示した。風景に対する無意識の段階から、1) 風景の意識化、個人表象化（風景の発見）、2) 風景の集団での価値共有と、「語り」を通じた集団表象化、3) 風景づくりの実践、すなわち計画の提案と実現における合意形成、という各計画論的段階においては、計画・運営の目標も手段も異なる。では、その各段階において、どのような計画・運営が期待され、いかなる手立てが有効であろうか。以下に筆者の考えを示す。

1) 風景の個人表象化の段階では、意識づけのきっかけ、関心の拡大、景観の成り立ちや仕組みの理解、風景表現の機会の拡大が必要であり、そのための有効な手立てとして、地域特性評価、資源マッピング、資源再発見・勉強・表現の機会形成などが挙げられる。

2) 次に、風景の集団表象化の段階においては、地域住民による価値や規範についての対話とゆるやかな共有、発意の機会の拡大が必要であり、そのための有効な手立てとして、創発ワークショップ、専門家/外部者との意見交換、発意の機会形成、複数の社会実験を通じた信頼・協力関係の構築などが挙げられる。

3) 最後の、風景づくりの実践の段階においては、目標

表-3 風景の動態論に基づいた景観計画・運営の枠組み（筆者による）

風景経験の各段階	マネジメント内容	有効な手立て
1) 風景の意識化、個人表象化（風景の発見）	意識づけのきっかけ、関心の拡大、 景観の成り立ちや仕組みの理解、 風景表現の機会の拡大	地域景観の特性評価、 地域資源のマッピング、 資源再発見・勉強・表現の機会形成
2) 風景の集団での価値共有と「語り」を通じた集団表象化	地域住民による価値や規範についての 対話とゆるやかな共有、 ソーシャル・キャピタルの形成、 発意の機会の拡大	創発ワークショップ、発意の機会形成、 専門家/外部者との意見交換、 複数の社会実験を通じた信頼・協力関係の 構築
3) 風景づくりの実践、計画の提案と実現における合意形成	目標像、戦略とシナリオ、規範の構築 と共有、 合意形成にむけた対話と協議、 アクションプランの設定と実行、 事業（整備、管理）への参画と協働	ビジョニング、シナリオ・プランニング、 規範とルールづくり、 対話と協議の場の設定、 計画案の公開と支援の呼びかけ、 既存の制度や事業の活用

像、戦略とシナリオ、規範の構築と共有、合意形成にむけた対話と協議、アクションプランの設定と実行、事業（整備、管理）への参画と協働が必要であり、そのための有効な手立てとして、ビジョニング、シナリオ・プランニング、規範とルールづくり、対話と協議の場の設定、計画案の公開と支援の呼びかけ、既存の制度や事業の活用などが挙げられる。これについて表-3に整理した。

さらに、これらを風景づくりの主体となる地域住民に着目してみると、風景づくりの実践に不可欠なのは、積極的な態度、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）の継承と新たな形成、組織内部での合意形成、提案の機会の確保、提案能力の向上、全関係主体間での合意形成（行政との協働）などが課題として挙げられる。このとき、価値判断の共有や、より質の高い合意形成へと導くことを、支援する有効な技術と手法が必要となる。これについては従来のまちづくりやコミュニティ・デザインの分野において、実践の中からいくつか生み出されてきた⁸⁴⁾。これらは本稿では扱わず、別稿に委ねる。以下では「語り」に基づく景観の計画・運営に類似する視点をもつ対話型都市計画理論を挙げ、景観の計画・運営に向けた課題の整理を行う。

(2) 対話と討議に基づく景観計画

a) 対話型の都市計画理論

現代の都市計画像が多分化した社会背景のなか、1990年代後半から、対話を重視した都市計画が提唱され理論化されつつある。高見沢によって紹介される対話型都市計画理論は、ユルゲン・ハーバマスの理論的基盤の上に、パツィ・ヒーリー⁸⁵⁾やジュディネス・イネス⁸⁶⁾によって理論化が進んでいるとされる⁸⁷⁾。また、小泉によって紹介される、対話型都市計画理論の基礎となるハーバマスの対話理論⁸⁸⁾は、国家でもなく、市場でもない、ネットワーク化された多様な主体によって構成される市民社会が、

生活世界に見いだされる諸問題を凝集・増幅し、政治的公共圏へと付託する重要な役割を担っているとする⁸⁹⁾。そこでは、対話を行い諒解が形成されることに合理性を見いだす「対話的合理性 *communicative rationality*」の概念が示されている。すなわち、個々の主体の多様な発意の連携と集合（集合性、共約性）によって公共性が形成されるという考えである。このハーバマスの対話理論に基づき、都市計画への応用の枠組みが整えられつつあるが、一方で、市民参加が能動的で、政府が調整的な役割を果たす場合にしか有効でないとの指摘もある⁹⁰⁾。この指摘を含めても、この対話型の概念は、地域の景観計画においても有効であると考ええる。

ボトムアップ型の風景づくりの担い手となるのは、コミュニティである。すなわち、歩いて暮らせるコミュニティレベルの圏域を住民生活の基礎単位として意識し、地域コミュニティの担い手である住民等を中心として、互助、共助による顔の見える地域づくりを推進し、地域力の向上を図ることが有効であろう。

前章までに述べたような、都市環境の知覚的な質という切り口での景観の評価と再定義を、まずは地区スケールで行い、目標達成型で景観計画を積み上げながら、地区から地域へ、都市全体へと、そのまなざしを広げていくのが有効な手立てだと考える。そのとき、絵を描いたら終わり、ではなく、むしろ逐次細かな意志決定が必要であり、当然ながら行政との協働も不可欠である。

b) ソーシャル・キャピタルの役割と形成

風景づくりの実践においては、住民たち自らが、景観の評価、計画、管理の一部を担うことが求められる。そこで不可欠なのがソーシャル・キャピタルである。それは、人びとの社会的なネットワークのなかで共有される規範、価値、信頼を含み、そこでの関係性を通じて人びとの協力や共同行動を推進し、共通の目標と相互の利益を実現するために貢献するものである^{91), 14)}。このネット

ワークは、利己心によってではなく、「同感」を中核とする道德感情のシステムによって支えられる。

担い手としての地域住民そのものに目を向ければ、じっさいの現実の都市においては、同じ地域に住んでいる住民の間では、仕事もライフスタイルも趣味教養も、十人十色のばらばらである状況にある。そんななか、風土性を支える社会集団はいかにあるべきか、この問いに対して、ジーバーツの視点は示唆に富む^{92, 101}。すなわち、地域住民が、生活に必要な行動に根ざした集団としてではなく、生活様式・ライフスタイルとして特定の生き方を「選択」することによって、文化的社会集団として都市空間の再生に関わるという視点¹⁰⁰である。ここには、まちづくりを通じて地域住民が共同体を形成する可能性を示している。

風景づくりの実践を実行するのは主体となる組織（アソシエーション）であり、組織の形成・連帯・連携と、組織自体の主体能力の構築 *capacity building* が重要な鍵となる。そのためには、さまざまな機会の拡大が望ましい。この機会とは、資源の発見、地域の学習、価値共有や合意形成をめざした対話、発意、事業参画のようなものである。施策面からいえば、質の高い対話を有む上記のような機会を与えること、政策へと発展できる環境を整えることの重要性を指摘できる。

(3) 風土性の回復という風景づくりの可能性

風景づくりの目的は、見えや環境の表層的な整備ではなく、より根源的な、風景表象の基盤となる風土的關係の再構築がめざされるべきであろう。そこで、前章の考察を合わせて、本稿で具体化した5つの「風土的關係」の再構築という意味での、風景づくりの可能性を探ってみよう。それぞれの関係について、以下のような可能性を見出すことができる。

- 1) 視覚的關係：景観の視覚的効果を読み解き、眺めに対して見出した意味や思想を理解し、その関係の再生に努める。伝統的な造景の意匠を再発見する。
- 2) 知覚的關係：ある特定の社会集団が感じている潜在的な知覚的環境を記述する。その集団が心理的満足を得る環境条件を探り、それをつくるように努める。
- 3) 象徴的關係：景観表象の読み解きを通じて、ある時代と場所に固有の象徴的關係を把握し、その関係の保全や、現在への再生を試みる。
- 4) 社会的關係：農村や都市など、社会と環境のあり方を把握し、景観形成のメカニズムを理解する。現在の景観の成り立ちを知り、それを尊重して、景観面の急激な変化や破壊を起こさないように、ゆるやかに新しい社会のあり方に対応できるよう、あらゆる面で補完しながら、新たな景観維持・形成のあり方へと導く。
- 5) 情緒的關係：場所愛着の観点から、開発における景観

影響評価を行う。必要に応じて、原風景の再生を試みる。

以上、風土性の回復を目指した風景づくりの可能性について、本稿で考察した5つの風土的關係に分けて述べた。このように、いかなる関係に着目して風景づくりを行うのかを自覚できれば、風景づくりの議論も明確になるのではないだろうか。今後も、各関係に関するさらなる考察を蓄積し、理論的にも実践的にも充実させていきたい。

4. まとめ

本論では、Berqueの風土論、木岡の風景論を理論的な基礎として、地域住民を主体とした景観の計画・運営のための理論を基礎づけること、実践理論へと展開することを試みた。以下にその成果を示す。

本論では、まず、風土論の論点の整理を行った（2章）。そこでは、風土が「人間存在の構造契機」となること、それを意識し積極的に実践において表現することが、風景の回復、ひいては風土性の持続につながることを確認した。そして、その実践のためには、「語り」による風景の集団的な表象化が有効であること、それを導く計画論が必要であることを指摘した。

次に、風景は、特定の文化的背景のもと特定の見方をもって「発見」される歴史的産物であるとされるが、その風景の誕生の背景となる風土的關係を知ることの重要性を指摘した。そして、風土へのまなざしに基づいた「わがまち」風景の発見と、その価値共有のために、風景がいかなる風土的關係を基盤として表象し得るかについて論じた（3章）。すなわち、この風土的關係をより理解するために、1) 視覚的關係、2) 知覚的關係、3) 象徴的關係、4) 社会的關係、5) 情緒的關係の5つの切り口を示し、それぞれの関係について、風景を対象とした既往研究の再整理を行い、切り口ごとの風土論における位置づけを明確にした上で、課題と展望を示した。

さらに、木岡による風景経験の構造論的な把握と動態論に基づいて、「語り」の観点から、景観の計画・運営における実践論を展開し、風景づくりの考え方の新たな枠組みを示した（4章）。本枠組みは、地域住民の風景に対する意識を、個人表象の段階から実践行動まで、変化させること導くことを目的としている。すなわち、風景経験の各段階に対して、風景に対する無意識の段階から、1) 風景の意識化、個人表象化、2) 風景の集団での価値共有と、「語り」を通じた集団表象化、3) 風景づくりの実践、すなわち計画の提案と実現における合意形成、と区分し、各段階における計画の目標と手段を明確化した。また、風景づくりの主体となる地域住民が実践者となるための課題として、主に計画の手続きと組織形成の

課題における課題を指摘した。

以上、本論全体を通しての主張は、風土に対する理解や風景についての「知」を、学術面で発展させること、ならびに、地域住民自らがそれを意識し、実践（計画・運営）することにより、日本の風土ならびに風景の持続と新たな創造を目指していくこと、の重要性の指摘である。前者については、幅が広く奥が深く、さまざまな概念が入り乱れる風景研究を、風土論や風景表象の視点から分かりやすく整理することを目論んだ。後者についても、風土に根ざしたまちづくりという、抽象的で分かりにくい概念に対して、ベルク・木岡の哲学的論考を計画的論に展開することで、やるべき計画・運営の目的と手段を明確にすることを目論んだ。本論は筆者の試論であるが、今後修正を加えながら展開し続けたいと考える。

謝辞：土木計画学研究委員会には、名誉ある発表の機会を与えていただきましたことを感謝いたします。

論文奨励賞の受賞論文「京都の古庭園における地形的圍繞の構成と眺望景観の特性」は、京都大学川崎雅史教授と中島功氏（現在、SONY勤務）との共著であります。川崎教授には、さまざまな側面から助力をいただきました。また、広島工業大学樋口忠彦教授と岐阜大学出村嘉史准教授には、学生時代を通じ、また現在に至るまで、研究活動を通じて多大なるご教示をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

補注

- [1] 遡れば明治41年には内務省有志によって「田園都市」が紹介されたとき、都市と自然が共存する日本固有の都市・農村のあり方が探られていた。このロマン主義運動の延長としての運動も、いくつかの郊外住宅地を生み出すにとどまる。旧都市計画法の風致地区、市街地建築物法的美観地区の創設は一定の成果を上げたものの、戦前の都市美運動も東京緑地計画も頓挫し、戦後もさまざまな都市問題に対応した運動が起こったが、よい都市景観をつくるという考え方が都市政策の根本に位置づけられることはなかった。
- [2] 一方、景観の「保全」については自然公園や歴史的町並み、一部の古都の山裾部など、その対象はごく限られているが、多くの蓄積が残されている。
- [3] たとえば、欧米諸国においては、市民生活の質（QoL）に基づく都市政策の運営や評価を行う例が多く見られる。
- [4] 近年の土木の景観・デザイン分野においては、都市・地域景観そのものが実践の対象とされはじめている。そこには一般解は存在しない。すなわち、その地域の社会状況も多種多様で、地域住民がどのような景観のなかで暮らしていきたいか、どのような景観を目指すかという考え方も、問題の設定の仕方も、解決策の導き方も様々ではない。
- [5] 景観を構成するのは公有地と私有地である。交通計画におけるモビリティ・マネジメントと同様、景観の計画・運営においても「技術的問題」という側面をもつだけでなく、「社会的問題」の側面も同時に孕んでいる。
- [6] 藤井は、和辻の風土論には「健全なる風土と不健全なる風土の別が論理的に指し示され得ない」ことを指摘し、実践的風土論として「近代保守思想」の有効性を主張しており、一つの風土論の方向性を示した。また、都市政策上の風土の位置づけとし

て、「経済や景観や防災や交通といった一なる風土から分化した個々の側面を個別に取り扱うような政策は正当化され得ないのである。それら諸相の総体たる「風土」こそが、唯一、政策対象として正当化され得るのである」と論じた。

- [7] 和辻は、我々人間が風土を背負うのならば、風土による規定は人間の自由な発動にも一定の性格を与えるとした上で、「道具としての衣食住が風土的性格を帯びることは言うまでもなく、さらに根本的に、人間が己れを見いだすとき、すでに風土的規定の下に立っているとすれば、風土の型はやがて自己了解の型とならざるを得ない」と述べている。
- [8] そしてこれは同時に近代的風景観をこえた、あらたな現代的風景観の出現を予見させる。風景表象の主題は、十八世紀末から十九世紀初頭のヨーロッパにおいて、美、崇高性、ピクチャレスクであった（前掲 風景と人間）。十九世紀末から二十世紀初頭の日本においては、自然地理学的な知識や、自然主義的、浪漫主義的な風景観が風景表象を形成してきた。ところが今では、人びとの関心は、私たちが住む環境そのものに向けられ始めている。
- [9] 高橋康夫は、京都の山々を題材に、山に対する観念的イメージについて整理し、神なる山（神の住む山）、国見の山、歌垣の山、青垣山、葬地としての山（死者の住む山）、修験の山などの伝統的・土着的な観念に基づく見方と、須弥山、玄武の山（北岳）、神仙の山（三山、五山と南山）、鎮めの山（五嶽、五岳）などの渡来思想に由来する観念に基づく見方を挙げる。
- [10] 建築物の集合による空間形態とその見え方を把握しようとしたタウンスケープ派は、直接的には都市景観を操作の対象としては扱う立場をとらず、評価対象として捉えており、その評価の指標による要素間の関係の再構築を目指している。
- [11] 当時のアメリカの都市のイメージアビリティの低さを背景として、広域圏の都市の形態やデザインに関心をもっていたリンチの考えは、住民が自分の町に対して抱く「内心のイメージ」を取り上げたという点で革新的であった（都市のイメージ）。
- [12] 負のイメージの要因となる要素をなくす、改善する、それが不可能な場合は隠す、といった対症療法的な方法をとることや、正のイメージの要因となる要素を強めたり規範化することは主要な方針となるだろう。
- [13] 離人症患者が外界の実在感を失うとともに自己がなくなったと感じるのは、意識体験に通常は伴っているクオリア（経験の主観的クオリティ、ある人が自分のあり方として感じ取っている心境）が消失するため。「自己」の実感というのは私と世界のあいだにアクチュアリティが成立しているという行為的事実にほかならない。
- [14] 吉村は、ソーシャルキャピタルを機能面から類型化し、1) コミュニティ構成員の結束力を高め、組織内での協調行動を促す結束型、2) コミュニティと、行政、NPO、市場などの外部との関係を構築する連携型、3) 同質的な外部のコミュニティの関係を構築する橋渡し型を挙げる。
- [15] ジーバーツは、フェイス・トゥ・フェイスの出会い、現実の知覚的体験、そして直接的関与のための生活空間として認識される「アゴラ」に着目し、生活のための文化的、場所特定の空間を意味する「アゴラ」としての都市空間の再生を主張する。
- [16] ジーバーツの視点は、遺産、記憶、言語、非言語文化、からリージョナル・アイデンティティを見だし、その文化の中で「生きること」の実践を通じて、自己のアイデンティティを見出していく生き方が可能であることを示唆している。

参考文献

- 1) オギュスタン・ベルク：風土性に立った倫理と公共性、（基調講演 特集／風土論・環境倫理・公共性）、千葉大学公共研究 第3巻第2号、pp.26, 2006.9.
- 2) 木岡伸夫：風景の論理 - 沈黙から語りへ、世界思想社、序 pp.4, 2007.
- 3) 前掲 風景の論理 - 沈黙から語りへ、pp.102.
- 4) オギュスタン・ベルク著、木岡伸夫訳：風景という知 - 近

- 代のパラダイムを越えて, 世界思想社, 2011.
- 5) 前掲 風景という知, ユクスキュルの定義づける環境世界 (Umwelt)として把握された環境(Umgebung)と同意.
 - 6) オギュスタン・ベルク著, 三宅京子訳: 風土としての地球, 筑摩書房, pp.58, 1994.
 - 7) 藤井聡: 実践的風土論にむけた和辻風土論の超克ー近代保守思想に基づく和辻「風土: 人間学的考察」の土木工学的批評ー, 土木学会論文集D, 62(3), pp.334-350, 2006.
 - 8) オギュスタン・ベルク著, 中山元訳: 風土学序説 - 文化をふたたび自然に, 自然をふたたび文化に, 筑摩書房, pp.22, 2002.
 - 9) アランコルバン著, 小倉孝誠訳: 風景と人間, 藤原書店, pp.4, 2002. ただし木岡の訳に対する指摘を含んでいる. (前掲 風景の論理 - 沈黙から語りへ, pp.15)
 - 10) 前掲 風土学序説, pp.281.
ベルクによる「風景」の定義として, 「風土の感覚的かつ象徴的次元であり, 感覚で捉えうる風土性の現れ」がある (前掲 風土としての地球) .
 - 11) 和辻哲郎: 風土- 人間学的考察, 岩波書店, 1963.
 - 12) 藤村安芸子: 「故郷」と「風景」: 安彦一恵, 佐藤康邦編, 風景の哲学, ナカニシヤ出版, pp.161, 2002.
藤村は, 柳田が, 過去の歴史を読みとるという視点を明確に打ち出しつつ, 「風景」という言葉を意識的に使用している, とした.
 - 13) 前掲 風景の論理 - 沈黙から語りへ.
 - 14) 阿部一: 日本空間の誕生, 一コスモロジー・風景・他界観, せりか書房, 1995.
樋口忠彦: 風景の型, 日本の美学 13, pp.61-71, 1989.
 - 15) 前掲 風景の論理 - 沈黙から語りへ, pp.125.
 - 16) 樋口忠彦: 景観の構造, 技報堂, 1975.
 - 17) Kevin Lynch 著, 丹下健三・富田玲子訳: 都市のイメージ (原題: The Image of the city, 1960), 岩波書店, 1968.
 - 18) 本中眞: 日本古代の庭園と景観, 吉川弘文館, 1994.
 - 19) 黄永融: 風水思想における自然景観の捉え方に関する研究, ランドスケープ研究 59(5), pp.21-24, 1996.
黄によれば, 風水の起源は生活経験などに基づいた古代の「地形学」であると考えられ, 風水とは人間に対して好的な居住環境を選択する技術であったという.
 - 20) 山口敬太, 川崎雅史: 平安京周辺部の別業における地形的圍繞の空間的特性, 土木学会論文集D, Vol.64, No.4, pp.598-607, 2008.と, 山口敬太: 近世初期の文人山荘における隠遁の風景(6章), 京都の野における風景の発達と持続に関する研究, 京都大学博士論文, 2009.
 - 21) 高橋康夫: 京都と山並み; 高橋康夫他編: 図集 日本都市史, pp.294-307, 東京大学出版会, 1993.
 - 22) 中村良夫: 大地の低視点透視像の景観論的特質について, 土木計画学研究論文集 Vol 1, pp.1-10, 1984.
 - 23) 齋藤潮: 名山へのまなざし, 講談社, 2006.
 - 24) 神山藍: 「見え方」と「見方」による山容景観評価方法の考察ー京都北山を対象として, 土木計画学研究・講演集 vol.42, 招待論文, 2010.
 - 25) 出村嘉史, 大島充功, 山口敬太, 樋口忠彦: 京都東山の見かけ高さに基づく主峰視点領域の分布特性, 土木学会論文集D, Vol.66, No.1, pp.46-53, 2010
 - 26) 山田圭二郎: 間と景観ー敷地から考える都市デザイン, 技報堂出版, 2008.
 - 27) 山口敬太, 中島功, 川崎雅史: 京都の古庭園における地形的圍繞の構成と眺望景観の特性, 土木学会論文集D, Vol.65, No.3, pp.317-328, 2009. (平成 22 年度土木学会賞論文奨励賞受賞論文)
 - 28) 樋口忠彦, 杉山公彦: 明治期東京の名所の変遷過程について-名所絵を対象にして, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集 17, pp.511-516, 1982.
 - 29) 日高圭一郎, 有馬隆文, 鶴心治, 坂井猛, 萩島哲: 地方における名所とされた神社の立地特性に関する研究 - 「大日本名所図録 福岡縣之部」を事例として, 日本建築学会計画系論文集 (597), pp.93-100, 2005.
 - 30) 谷本あづみ, 久野紀光, 齋藤潮: 鎌倉の谷戸における別荘立地選定の地形的要因, 都市計画論文集(39), pp.133-138, 2004.
 - 31) 笠原知子: 技師たちがみた江戸・東京の風景, 学芸出版社, 2010.
 - 32) ジョナサン・バーネット: 都市デザインー野望と誤算, 鹿島出版会, 2000.
 - 33) ル・コルビュジェ著, 坂倉準三訳: 輝く都市, 鹿島出版会, 1968.など
 - 34) ゴードン・カレン著, 北原理雄訳: 都市の景観 (原題: Townscape, 1961), 鹿島出版会, 1975., トーマス・シャーブ著, 長素連・長もも子訳: タウンスケープ (原題: Town and Townscape, 1968), 鹿島出版会, 1972. など
 - 35) 都市デザイン研究体: 日本の都市空間, 彰国社, 1968.
横文彦編著: 見えてくれる都市, 鹿島出版会, 1980.など
 - 36) 宮本雅明: 都市空間の近世史研究, 中央公論美術出版, 2005.
 - 37) 西嶋啓一郎, 仲間浩一: 朝鮮通信使による風景の記述に見られる風景生成と定着について, ランドスケープ研究 63(5), pp.569-572, 2000.
 - 38) 出村嘉史, 大住由布子, 川崎雅史, 樋口忠彦: 本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景域の構成, 土木学会論文集D, Vol.63, no.2, pp.158-168, 2007.
 - 39) 山口敬太, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦: 近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究, 土木学会論文集D, Vol.66, No.1, pp.14-26, 2010.
 - 40) 前掲 都市のイメージ.
 - 41) ケヴィン・リンチ著, 北原理雄訳: 知覚環境の計画 (原題: Managing the Sense of a Region, 1976), 鹿島出版会, 1979.
 - 42) トマス・ジーバーツ著, 蓑原敬ほか訳: 都市田園計画の展望 - 「間にある都市」の思想, 学芸出版社, pp.135, 2006. ジーバーツも振り返って, ポストモダンの時代, 人間的な計画哲学が展開できる場はなく「結果的には, ケビン・リンチのこのアプローチに従い, これを深めた都市計画や都市デザインの理論家や実務家はいなかった」とした.
 - 43) 前掲 知覚環境の計画, pp.88.
 - 44) Jack Nasar: the Evaluative Image of the City, Sage Publications, Inc, 1998.
 - 45) W.H.ホワイト著, 華山謙訳: 都市とオープンスペース, 鹿島研究所出版会, 1971.
Project for Pubic Space 著, 加藤源ほか訳: オープンスペースを魅力的にする一親しまれる公共空間のためのハンドブック, 学芸出版社, 2005.
 - 46) 真鍋陸太郎, 村山顕人, 小泉 秀樹: インターネット地図型掲示板での情報の収集・蓄積と議論の展開-三鷹市基本計画改定での e コミュニティカルテの運用を事例に, 都市計画論文集 (40), pp.85-90, 2005.
 - 47) 前掲 風土学序説, pp.289,
 - 48) オギュスタン・ベルク: 牧神パンの洞窟と日本の住まい; 日本の住まいと風土性, 日文研叢書, 国際日本文化研究センター, pp.157, 2007
 - 49) 内藤湖南: 日本風景観; 日本文化史研究, pp.255-256
 - 50) 柄谷行人: 日本近代文学の起源, 講談社, 1988
木股知史: イメージの近代日本文学史, 双文社出版, 1988
加藤典洋: 日本風景論, 講談社, 2000. など

- 51) 西田正憲：瀬戸内海の発見- 意味の風景から視覚の風景へ，中央公論新社，1999.
- 52) 前掲 日本空間の誕生 コスモロジー・風景・他界観.
- 53) 奥野健男：文学における原風景 原っぱ・洞窟の幻想，集英社，1972
- 54) 前掲 文学における原風景 原っぱ・洞窟の幻想.
- 55) 大室幹雄：月瀬幻影 -近代日本風景批評史，中央公論新社，2002.
- 56) 長谷川成一：失われた景観-名所が語る江戸時代，吉川弘文館，1996.
- 57) 鈴木章生：江戸の名所と都市文化，吉岡弘文館，2001.
- 58) 山口敬太，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究 -祇王寺，落柿舎，厭離庵の再興事例を通して-，土木計画学研究・論文集，Vol.24, pp.307-314, 2007.,
前掲 山口ら：近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究.
- 59) 北川宗忠：「近江八景」とその展開の研究，流通科学大学論集. 人文・自然編 13(2), pp.27-42, 2000
- 60) 真木利江：重森三玲が「雪舟作庭」庭園の石組にみた「絵画的」特徴，ランドスケープ研究 Vol. 73 No. 5 pp.373-376, 2010.
- 61) 大室幹雄：志賀重昂『日本風景論』精読，岩村書店，2003.
- 62) 黒田乃生，小野良平：明治末から昭和初期における史蹟名勝天然記念物保存にみる「風景」の位置づけの変遷，ランドスケープ研究 67(5)，pp.597-600, 2004.
- 63) 前掲 日本近代文学の起源，前掲 日本風景論.
- 64) 川本三郎：荷風と東京-『断腸亭日乗』私註，都市出版，1996.
- 65) 樋口忠彦：郊外の風景-江戸から東京へ，教育出版，2000.
- 66) 前掲 知覚環境の計画，pp.54.
- 67) 高橋美貴：環境史研究の課題と共生論，共生社会システム学序説，青木書店，2007.
- 68) 佐野静代：中近世の村落と水辺の環境史—景観・生業・資源管理，吉川弘文館，2008.
- 69) 俵浩三：北海道緑の環境史，北海道大学出版会，2008.
- 70) 歴史地理学会：災害・防災への歴史地理学のアプローチ，歴史地理学 42-1, 2000. 同 43-1, 2001.
- 71) ここではすべては挙げられないが，都市計画に関するものとしては，石田頼房：日本近現代都市計画の展開—1868-2003，自治体研究社，2004.，渡辺俊一：「都市計画」の誕生—国際比較からみた日本近代都市計画，柏書房，1993.を挙げる.
- 72) 内藤廣：都市戦略としてのデザイン，都市計画 276 号，日本都市計画学会，2008.12.
- 73) 風致については多くの研究の蓄積があり，ここでは挙げ尽くせない. 中嶋節子の一連の研究(1994-)や，伊東(1978)，種田ら(1989)，皆方(1997)，原ら(2006)の研究など.
- 74) 佐藤昌：日本公園緑地発達史，都市計画研究所，1977.，石川幹子：都市と緑地—新しい都市環境の創造に向けて，岩波書店，2001.，真田純子：都市の緑はどうあるべきか—東京緑地計画の考察から，技報堂出版，2007.など
- 75) 村串仁三郎：国立公園成立史の研究—開発と自然保護の確執を中心に，法政大学出版局，2005.，丸山弘：近代日本公園史の研究，思文閣出版，1994.など
- 76) 砂本文彦：学界展望・日本近代都市史，建築史学 第 55 号，建築史学会，2010.
- 77) 園田美保：住区への愛着に関する文献研究，九州大学心理学研究 3, pp.187-196, 2002.
- 78) Low and Altman: Place attachment - Human Behavior and Environment -, Springer, 1992.
- 79) C. M. Raymond, G. Brownb, D. Weber: The measurement of place attachment : Personal, community, and environmental connections, *Journal of Environmental Psychology*, Volume 30, Issue 4, pp.422-434, 2010.12.
- 80) 前掲 住区への愛着に関する文献研究
- 81) Taylor, R.B., Gottfredson, S.D., and Brower, S., Attachment to place :discriminant validity, and impacts of disorder and diversity, *American Journal of Community Psychology* 13, pp.525-542, 1985.
- 82) 前掲 知覚環境の計画，pp.38.
- 83) 木村敏：関係としての自己，みすず書房，2005.
- 84) 佐藤滋編著：まちづくり市民事業—新しい公共による地域再生，学芸出版社，2011.，佐藤滋編著：まちづくりの科学，鹿島出版会，1999. など
- 85) Healey, P. : Collaborative Planning, Macmillan Press, 1997.
- 86) Innes, J.E.: “Plannning through Consensus Building”, *Journal of the American Planning Association*, 62 (4), pp.460-472.
- 87) 高見沢実：都市計画理論とその動向，都市計画の理論—系譜と課題，学芸出版社，2006.
- 88) ハーバーマス.J.著，細谷貞雄・山田正行訳：公共性の構造転換，未来社，1994.
- 89) 小泉秀樹：都市計画理論の歴史的展開と都市計画の公共性，前掲 都市計画の理論—系譜と課題，2006.
小泉秀樹：コラボラティブ・プランニング-多様な主体による討議と協働による都市計画への転換，都市問題研究 59(1), pp.86-99, 2007.
- 90) 前掲 都市計画理論とその動向，pp.29.
- 91) 吉村輝彦：都市計画とソーシャル・キャピタル，前掲 都市計画の理論—系譜と課題，2006.
- 92) トマス・ジーバーツ著，蓑原敬朗訳：都市田園計画の展望 -「間にある都市」の思想，学芸出版社，pp.97, 2006.

A TENTATIVE THEORY OF LANDSCAPE PLANNING AND MANAGEMENT BASED ON MESOLOGIE

Keita YAMAGUCHI

This article aims at developing the practical theory of community-based landscape planning or management for local inhabitants, based on Mesologie expanded by Augustin BERQUE and Nobuo KIOKA. Firstly, I summarized the points of Mesologie as the theoretical foundation, and described the mesological relationship between human and their surrounding environment from 5 points of view: visual, perceptual, symbolic, social, and emotional relationships. Secondly, I enunciated the new practical theory of community-based landscape planning and management, resting on the structural framework of scenic recognition and notion of “narrative” by KIOKA.